第十三講その１　趣味論・工芸論〈選択肢問題〉

　蒐集(しゅうしゅう)は心理的には興味であり、生理的には性癖である。これらが結び合う故、人間をたやすく夢中にさせる。これを本能の一つに帰してもよい。これが目覚めると心が忙しくなる。眠っている者に蒐集はない。冷たく見れば馬鹿らしいことでもあろう。理性で片付ける者に蒐集はない。この道に入れば誰も熱中する。知よりも意や情が忙しく働いてくる。これが嵩じるにつれて人間は遠慮なく打算の外に出て行く。蒐集は人間を勇敢にする。悪くとれば向う見ずになってくる。前進のみ知って退却を知らない。退却すれば蒐集の行為は止まる。［Ａ］は人間をいくじなくする。無理しても買いたいほどの熱が起らずば蒐集はものにならない。物を見ればこまっても買いたいのである。こまることがなお蒐集の心をそそるのである。こまらないような者は、この道では一(ひと)かどの人間ではなかろう。毎月これこれの予算内で購(あがな)うというようなのは、まだ奥義には達していない。そんなやり方は冷静だからできるのである。蒐集にはしばしば予算への忘却が伴うものである。一時は借金しても不義理しても買いたくさえなるのである。踏みはずしてしまってはこまるが、かかる無理を敢えてするほど熱中するのは、蒐集が一層いきいきしてきた証拠ともいえる。常識的には愚(ぐ)の骨頂(こっちょう)だが、この愚かさに達してこそ妙味がある。人はやすやすとこの愚を嗤(わら)うが、平気で愚かなことをするのは、どこか自分を忘れ得るいい性質があるからである。信者はすべての財物を平気で神に捧げる。打算的な人間はこんなことをしない。何か夢中になるものを有(も)っているのは、却って<u>人間らしさ</u>[B]があるからともいえよう。すきまのない人間にはどこか非人間的な所がある。

　レムブラントは名画を集めるので金を使い果たし、惨めな死に方をしたという。あれほどの画家がと人はいうかも知れぬが、それだけ夢中になったのは、レムブラントに純な心があったからともいえる。または人一倍絵の美しさが感じられたからともいえる。貧乏する苦しみよりも、絵を買う悦びの方が強かったのである。貧乏は忘れ得ても、絵は忘れられなかったのである。貧乏なんか結局どうでもよかったのであろう。

　道具好きの茶人が、夢中で茶器を探し廻った話が沢山残る。名器に向かっては金子(きんす)などは軽い物である。大名達にとっては欲しさの前には、お城さえも小さく見えたであろう。ものを愛したその気持ちがよく分かる。茶器に冷淡では、もともと茶事など

起こるまい。生活が常識的なら茶事のごとき余計な遊びであろう。茶器などなくったっていいからである。しかしなくったっていいものに夢中になるのが蒐集の面白い点である。C人間にこの余裕がなかったら、生活はさぞ冷たいであろう。

大体金があれば品物を集めることができると思われるかも知れぬが、一面の見方に過ぎない。物を集めるのに金も力になるが、それ以上に熱心が力である。それ故金が不足でも熱情がそれを充分に償(つぐな)ってくれる。否、金では見つからぬものさえ引き出してくる。人は買い集めるというが、妙なもので求める者には品物の方から近づくものである。金だけでは集まるものではない。むしろ金が余るようでは却ってろくなものは集まらない。なけなしの金で買ってこそ集まるのである。金が充分あればと思う時もあるが、しかし金があり余って集めるなら、さぞ面白さは減るだろう。物への愛も弱まるだろう。金がなければ買えないとか、金がないから買わないというのは嘘である。金があったって必ずしも物が買えるわけではない。金があったら却って買わないこともあろう。また金で買ったものが必ずしもいいとはゆかぬ。金で買えない沢山のものがある。いい蒐集には金以上の力が働いている。蒐集と空の財布とはつきものである。金があれば、あるだけ使い果たす気でなければ本当ではない。蒐集は一つの冒険である。これを非合理的な行為と称してもよい。しかし非合理的な所まで進めばこそ集まるのである。それは合理的な処置より、もっと不思議な働きをする。

これをただ道楽だといって片付けてしまう人もある。そうとられて差し支えないが、ただこういうことを知ってもらう必要がある。この世のすべての素晴らしいことは、利害を超えた所で生い立つのを。ものも道楽に達すれば本ものだともいえる。打算的な間は「遊戯」の境地からは遠い。要(い)りもしない蒐集がこの世には入り用なのである。これが無用の用である。不思議であるが、蒐集のために世界がどんなに多くのことを学んだであろう。

なぜ要りもせぬものを沢山集めるのかと聞く方がある。だがここは「なぜ」というような合理的な道ではない。入り用だから集めているのではない。別に心を惹くものがあるからである。集める者は、物の中に「他の自分」を見出しているのである。集まる品はそれぞれに自分の兄弟なのである。血縁の者がここで邂逅(かいこう)するのである。自分と集める物と、何かその間に遠く深い因縁があるのである。蒐集において自分の故郷が見出だせるのである。蒐集家は悦びを味わう。それ故物に廻(めぐ)り逢(あ)わずば何か淋しいのである。もの足りないのである。求める心に終わりはない。

蒐集はものへの情愛である。購うのはその機縁を作ることである。そうして集めることはその情を強めることである。強まるが故にさらに購うのである。購い集めずばこの情がつのる折は少ない。集めずともすむのは心が惹かれないからともいえる。だが心が薄らげば、理解も薄らいでくる。かかる意味で蒐集はものへの理解を強める道だといっていい。蒐集によってどんなに真理や美の内容が拡げられたことであろう。そうしてそのためにいかに多くの物が見出され、知られ、守られるに至ったであろう。良き蒐集は世界の価値を高める。それは高められた世界の展観ともいえる。誰だってそれを感嘆なくして眺めることはできぬ。

（柳宗悦（やなぎむねよし）の文による）

問１　[A] に入れるのに最適な語を、次から選べ。

①　蒐集　②　情　③　性癖　④　前進　⑤　打算

問２　傍線部Ｂ「人間らしさ」とあるが、次から、筆者の考える「人間らしさ」と最も関係の深いものを選べ。

①　義理　②　愚行　③　退却　④　打算　⑤　貧乏

問３　傍線部Ｃ「人間にこの余裕がなかったら、生活はさぞ冷たいであろう。」とあるが、ここでいう「余裕」とはどのようなことか。次から答えとして最適なものを選べ。

①　実益を離れたことを楽しむ気持ち
②　人生をひとつのことにかけるひたむきさ
③　貧乏などを忘れて趣味に打ち込もうとする意欲
④　得にもならないことに打ち込むための十分な時間
⑤　好きなものを蒐集することができる経済的なゆとり

第十三講その２　現代社会論〈選択肢問題〉

都会生活のわずらわしさから逃げ出したい。仕事、勉強、家事などから解放されたい。そうしたとき、人はしばしば旅に出る。旅を通じて、一時的な解放感を味わおうとする。

ここには、奇妙な逆説がある。そもそも、都会生活者のほとんどは、もともと農村に住んでいた。近代化に伴い、都会へ出てきたという歴史をもっている。もちろん、都会がよりよい就職口を提供してくれたからではあるだろう。しかし、人口の都市流入を促したのは、それだけではない。農村の古めかしい因習から逃げ出す。狭い共同体のしがらみから抜け出す。都会へ出れば、そうした束縛から解放されて自由になる。以上のような思いもあったに違いない。

かつての農民たちも、ときには旅に出ただろう。そのときだけは村の因習から自由になった。だが、都会への移動は、一時的なものではない。村の因習から永遠に抜け出すことを意味している。その点で、都会は村から逃げ出した旅人たちを恒常的に受け入れる所だといってもよい。

だが、どうだろう。今日の都会人たちもしばしば旅に出る。しかも、かつての村人たちを、はるかに上回る頻度で旅行をする。村から抜け出し、因習から解放されたはずの都会人。その彼らが、さらに都会から解放されることを願い、どこか遠くを訪れる。いったい、なぜか。

なるほど、都会は古い因習を解体し、人びとに自由をもたらした。それまでは抑圧されることが多かった個人的な欲望も、ずいぶん満たされるようにはなっただろう。だが、欲望が解放され自由になったのは、ひとり自分だけではない。ほかにも大勢いる。必然的にそこでは、多数の欲望が触合するようになる。もちろん、その欲望をすべてかなえるのは不可能である。そこで、自他の欲望を調整する必要が起こってくる。自分の欲望を満たすためには、この調整を自分に有利なように運ばねばならない。他人には、譲歩をさせる必要がある。この思いは、人びとを競争に駆り立てる。

かつての共同体では、村人たちの個人的な欲望は因習により抑圧されていた。必然的に欲望調整のための闘争もありえなかった。だが、今日の都会は欲望を解放する。そのため右のような競争が出現した。受験競争、出世競争、等々である。現代の資本

主義は、この競争に注ぎ込まれるエネルギーを養分として成長する。競争し合う個々の力を回収し、自らを発展させていく。これこそが、資本主義、ひいては都会の繁栄をもたらすのである。

さて、Aこうした競争社会は、決して居心地がよいものではない。確かに、因習的な抑圧は少なくなった。だが、競争に伴う疲労は、しばしば抑圧以上に耐えがたいものとなる。そこで、人びとは、都会からの脱出をもくろみだす。［B］からも、逃げ出すようになる。例えば、旅に出かけるわけだ。

旅といっても無料で行けるわけではない。それなりに、旅行資金を蓄える必要がある。つまり、働かねばならない。そして、旅行のための労働も、資本主義の発展に、結局は回路づけられる。資本主義社会から逃走するという行為自体が、資本主義の成長を促すのである。

（井上章一氏の文章に基づく）

問１　傍線部Ａ「こうした競争社会」とはどのような「競争社会」か。それに当てはまらないものを、次から二つ選びなさい。

① 人々の欲望を解放する都会での競争社会
② 個人的な欲望をすべて満たす都会での競争社会
③ 受験・出世などが個人の自由を抑圧する都会での競争社会
④ 自他の欲望調整のための闘争が行われる都会での競争社会
⑤ 調整に要する個々の力が資本主義の繁栄をもたらす都会での競争社会

問２　空欄［B］へ入れるのに最もふさわしいものを、次から一つ選びなさい。

① 現代の資本主義社会
② 因習から解放された自由な場
③ 競争原理に基づく活気あふれる都会
④ よりよい就職口を提供してくれる都会
⑤ 村を脱出して都会へ出てきたという歴史

第十三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その１の筆者　柳宗悦＝やなぎ　むねよし（一八八九〜一九六一）東京都生まれ、東京帝国大学文学部卒。民芸品の美に注目した美学者・思想家。柳宗玄（やなぎむねもと）の父親

●その２の筆者　井上章一＝いのうえ　しょういち（一九五五〜）京都府生まれ、京都大学工学部建築学科卒、同大学院修了。建築史家・風俗研究者。国際日本文化研究センター教授

●レムブラント（一六〇六〜一六六九）一七世紀オランダを代表する画家。「光の画家」「光と影の魔術師」と呼ばれる。代表作に『夜警』がある

語句

蒐集＝しゅうしゅう→コレクションすること。「収集」とも書きますが、ガラクタの収集と区別するため、価値あるもの（本人がそう思っているだけでも）を集める際には「蒐集」の字を使うようです

打算＝ださん→利害や損得を勘定すること

知情意（智情意）＝ちじょうい→いずれも人間の内面世界を指す表現で、それぞれ知性、感情、意志の意味。本文ではバラバラに出てきますが、三文字熟語でもあります。夏目漱石の小説『草枕』の冒頭にも次のように出てきます。「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」。人間の内面を表現する熟語には「喜怒哀楽」もありますが、今回の「知情意」もぜひ知識に登録しておこう

性癖＝せいへき→人の性質上の偏り

愚の骨頂＝ぐのこっちょう→愚かさの頂点　cf 真骨頂（しんこっちょう）→その人の本来の姿、神髄（しんずい）

因縁＝いんねん→仏教の因果関係・運命・縁

邂逅＝かいこう→思いがけなく出会うこと・めぐりあい

展観＝てんかん→広げて見せること。並べて多くの人に見せること

逆説＝ぎゃくせつ→一般的な考えとは反対のところに真理や真実がある・パラドックス

因習＝いんしゅう→昔から続くしきたり・特に現代に弊害を生じているしきたり

抑圧＝よくあつ→行動や欲望を無理に押さえつけること

資本主義＝しほんしゅぎ→社会主義や共産主義などの国家主体の計画経済ではなく、市場における商取引や企業活動（つまり競争）を主体としようとする経済ポリシー

復習問題　第十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

		①	②	③	④	⑤
（ア）	人間付き合いをダ算的に考える	打	駄	堕	惰	妥
（イ）	世話になった方へギ理を立てる	議	義	蟻	偽	戯
（ウ）	付加価値で国際競ソウ力をつける	装	走	争	相	壮
（エ）	自らのセイ癖に自覚的になる	姓	生	精	制	性
（オ）	騎馬戦で勇カンに攻め上る	感	敢	観	寛	漢
（カ）	人生にはユウ戯の時間が必要だ	雄	勇	遊	裕	悠
（キ）	人と人、人と物とのイン縁を思う	印	因	隠	引	韻
（ク）	未知なる秘境へと冒ケンに出発する	剣	件	検	険	見
（ケ）	不思議で魅惑的な境チへと人を誘う	弛	知	地	置	智
（コ）	作品の出来栄えに強く感タンする	嘆	淡	胆	担	端

第十三講その１　趣味論・工芸論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

蒐集
＝興味・性癖・夢中・熱中・情・意・
勇敢・前進・不義理・愚かさ・人間
らしさ・遊び・無用の用・非合理・
冒険

⇕ 対比

敵役＝常識

理性・打算・知・退却・予算・
冷静・義理・利害・合理的

《解説》

問１《空欄補充》

筆者は、「常識」とは違い（だからこそ、こうして本を書いているのです。常識レベルと同じ考えなら本など書きません！）蒐集を人間らしい、しかも勇敢な行為としてほめたたえています。一方 A は、その反対で、蒐集を止める方です。「人間をいくじなくする」方です。①の「蒐集」、②の「情」、③の「性癖」、④の「前進」すべて筆者側のキーワードで、対比混乱の誤りということになります。⑤の「打算」が正解です。本文によれば、蒐集は「打算の外に出て行く」行為ですから。まさに見事なグループ分けの問題です。

問２《傍線部説明》

筆者がいう「人間らしさ」です。コレクションに夢中になり、財産や予算などスコンと忘れてしまうようなカワイイ（家族は迷惑だろうな）側面です。理性や冷静さや計算高さの正反対です。というわけで②の「愚行」です。本文によれば「常識的には愚の骨頂だが、この愚かさに達してこそ妙味がある」「平気で愚かなことをするのは、どこか自分を忘れ得るいい性質」です。まさに文脈しだいですね。「愚行」は一般的にはネガティブ表現なのに、筆者によれば、人間らしさの刻印なのです。①の「義理」は対比混乱の誤りになります。本文によれば「不義理しても買いたくさえなる」とあります。③の「退却」、④の「打算」も冷静さ常識グループの言葉ですからね。⑤の「貧乏」はレムブラントの例です。具体例は、選ばないのが原則です。また、「貧乏なんか結局どうでもよかった」とあります。この点では記述に反する誤りとも言えます。

問３《傍線部説明》

こちらも筆者の見解を聞いています。②は正しい対比喪失の誤りです。「ひとつのことにかける」のか〝ふたつではダメ〟なのか、本文では比べられていません。こうして吟味の際、この選択肢中の言葉は何と比較しているのかなと考えると、ヘンだぞとか、いいぞとか分かります。④「十分な時間」が×です。コレクションに夢中になるとせわしなく忙しくなるはずです。記述に反する誤りです。⑤の「経済的なゆとり」もはっきりと本文の記述に反するものです。本文によれば「金があれば品物を集め

ることができると思われるかも知れぬが、一面の見方に過ぎない」「金があり余って集めるなら、さぞ面白さは減るだろう」とあります。それに、お金に余裕があるからコレクションするのは、冷静な計算の上ですから、対比混乱の誤りとも言えます。③はどうでしょう。「貧乏などを忘れて」が×です。問２の⑤と同じで、これも具体例ですからＮＧ。さらに言えば、忘れるも何も「貧乏なんか結局どうでもよかった」のです。したがって、記述に反する誤りとも言えます。①が正解です。本文によれば「要りもしない蒐集がこの世には入り用なのである」です。

模範解答

問１＝⑤　問２＝②　問３＝①

復習問題　解答　第十三講

（ア）①　（イ）②　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）②
（カ）③　（キ）②　（ク）④　（ケ）③　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）打算　（イ）義理　（ウ）競争　（エ）性癖　（オ）勇敢
（カ）遊戯　（キ）因縁　（ク）冒険　（ケ）境地　（コ）感嘆